

漂泊の俳人 井上井月—故郷の意味

高橋 実

落栗や座を定めたる窪溜り

漂泊の俳人井上井月の辞世の句と呼ばれる。この句は乞食井月の生涯を自ら揶揄した自嘲の句と言ってよい。一所不住の漂泊の身を落栗に例え、そしてその身の置きどころは地面の窪みでしかない。そうかと思えば

朝顔の命は其日其日かな

と言った句もある。命のはかなさを強調したのである。

このほど「にいがた文化の記憶館」（新潟市）で「漂泊の俳人 井上井月」展と映画「ほかいびと一井上井月一」上映講演会があった。講演はこの映画を作成した北村皆雄氏であった。七月十五日（土）新潟まで足を運んだ。井上井月は文政五年（1822）越後長岡に生まれ、二十歳後半ふらりと信濃伊那谷に現われ、生涯その地を第二の故郷として明治二十年（1887）伊那で没した。

井月は長岡藩の下級武士、刀研ぎ師井上家に生まれて、本名は井上勝造と言ったという。天保十年頃十八歳で長岡を出て江戸に向かう。芭蕉に憧れて「奥の細道」をなぞるように全国を放浪する。嘉永元年二十七歳で信州を訪れて以来、信州、特に伊那の家々を中心に漂泊し、句会を開き、俳句を詠み続けた。

井月は幕末から明治にかけて歴史が大きく動いた時代、家も家族も持たず旅に生きた俳人だった。その生き方や書・俳句に共鳴したのが、小説家芥川龍之介や室生犀星、俳人の種田山頭火だった。また良寛研究で有名な糸魚川の相馬御風、俳諧研究家木村秋雨などと言った人々によって井月は知られるようになった。

明治になって戸籍制度はできると無戸籍の井月は戸籍をとりに長岡に向かったというが故郷に帰らずまた伊那に引き返してきた。その時の句が

立ちそこね帰り遅れて行乙鳥

その前書きには「国へ帰ると云うて帰らざること三度」とある。

しかし、故郷は一時も忘れたことはなかったであろう。いつも魂は故郷長岡に帰っていた。次の句などにその気持ちが表れている。

初雁や^{ふた}立ち三立ち越の空

雪車に乗りしこともありしを^{みさちまき}笹糺

親もちし人は目出度し墓祭り

松の雪暖かそうに積もりけり
行暮れし越路やほだの遠明かり
用もなき雪のただ降る餘寒かな
初鮭やほのかに明けの信濃川
遣るあてもなき雛買ひぬ二日月
年々や家路忘れて年の春
妻持ちしことも有りしを着衣始

長岡には蒼柴神社境内・成願寺温泉・金峰神社境内・柿川追廻橋脇などに井月の句碑が七基建っている。

最初に挙げたほかに辞世の句と言われるものが次の句である。

何処やらに鶴の声聞く霞かな

この句について俳人金子兜太は辞世の句として最もふさわしいとして、その理由を「鶴の声だけでなく鶴の姿までがはっきりみえていて、井月は死のかすみのなかに、自分の清々しい去り行く姿として、鶴をみていたと受け取れるからである」と述べている。

涅槃会に一日後る別れかな

井月の死は釈迦の死の翌日二月十六日だった。

闇き夜も花の明りや西の旅

の句がある。

井月の生涯を見て、同じ越後の良寛の生き方と重ね合わせてみる。良寛は越後の出雲崎の名主の家に長男として生まれながら、十八歳で家を捨てて放浪するが、三十八歳で故郷に帰った。後半生を生家近くで過ごして最後はすぐ隣の島崎（現長岡市）の木村家で没した。名主の長男でありながら、その地位をなげうって出家し、またおめおめと帰郷した心のなかにその痛みをもちつつ良寛は生きたに違いない。井月はその故郷への想いを心の奥底に秘めつつ異郷の地で野垂れ死した。

江戸時代中期甲斐の国生まれの作佛師木喰五行も「無庵無宗」を掲げて全国を旅し、最仏像を彫り続け、後には死場所を明らかにせず、

木喰もいづくのはての行き倒れいぬかからすのゑじきなりけり

と詠んだ。その生涯とも重なる所がある。

故郷とは何か この放浪人の生き方はその意味を問い続ける。